164
955

僧俗教誡

016059-000-6

特16-387

僧俗教誡

西村　七平／校訂

M27. 8

ABC-1904

僧俗教誡

一人は誠を貴とし之を須身へ高官顯職に備はるとも誠なきは論するにたらず誠のひとつはこれを主君に致せば忠臣也是を父母に致せば孝子也これを夫婦にいたせば偕老同穴のよしみたがはず寶家亂るゝ事なし是を兄弟に致せば人倫むつまじくもろきをすくひ危きをたすくべしまことを神祇に致せば感應ひゝきの如し誠を佛道に致せば後世の樂果たなどゝ云ふあり賢は賢に出て誠なるべゝ愚は愚なるながら誠ならばたとひ一丁字を知らざるもあれば良友をせん

●施本適當新刊書廣告●

占部嗣講師述
●二諦の教へ　正價金一錢　郵稅五冊迄三錢
大德觀教法話
●二諦の鏡　正價金一錢　郵稅五冊迄三錢
●極樂道案內　正價金一錢　郵稅五冊迄三錢
●ダンマパーラ佛教演說　正價金一錢　郵稅五冊迄三錢
●身心安樂法　正價金一錢　郵稅五冊迄三錢
●婦德の綱領　正價金一錢　郵稅五冊迄三錢
蜂屋學師著
●眞宗念佛法語集　正價金二錢　郵稅五冊迄三錢
●嚴如上人御傳記　正價金三錢　郵稅五冊迄三錢
●雜誌有法藏

●嚴如上人御法話　正價金三錢　郵稅五冊迄三錢
小栗栖一等學師述
●貴婦人會法話　正價金三錢　郵稅金二錢
無住法師
●妻鏡　正價金五錢　郵稅金二錢
吉谷擬講師撰
●改悔文大意　正價金二錢　郵稅金五錢
●顯如上人御傳　正價金六錢　郵稅金二錢
●お千代物語　正價金十錢　郵稅金二錢
多田公敬君著
●實踐人道　正價金十錢　郵稅金二錢
躬行
●佛門修身要錄　正價金十錢　郵稅金二錢
●佛教讀本　正價金十錢　郵稅金二錢

發行所　京都市東六條　法藏館

一在家同事の習はせなどもかりにも解脱幢相の法衣をまとふ姿をもかへりみ形にもはぢて身の行ひ心のさま小人販夫に同すべからす其みさほ世間の君子と見ゆるやうにありあきは僧侶の身分也好ますとも机上に聖教を披きせめて詩文詠歌にも日を送らばさして檀越のそしりをまねかす目やすかるへしあるいおほく妻妾をたくはへて綺羅をつくし又い花街柳巷になづみて本心を失ふあり慱奕は天下の大禁なればいふに及いす酒宴遊藝にのみふけりて一絲一餐もみな如來白毫中の功德を賜ふとを知らす同しまゝに他の信施をついやさば佛祖の冥毗恐るゑきにあらすや頭をなでゝ深く慎むへし

一勤をこれ無價の寶なりと古語に見へたり已が勤へき業を懈ること

となりと唐の周公旦の天下の政をとれる哺を吐て餐するに及ばすひとたびゆあみをるにみたび髪を握れりとぞされば身のほど〳〵につきて此心さまにて勤むべきをなをざりにするとなかれ

一世人おほくなにわざを勤め勵みても宿世の因緣定りあればいま勤めいとなみてもいたらすとすてがてらにをるあり是を天竺の論師は宿作外道の見なりと訶せられたり其業を懈るとなく夜を以て日に繼て勵みても功をなさゝるこそ宿世の因緣にてもあらめたゞ宿世の因緣にまかせてろの業を廢せんい誠に宿作外道の見なるへし古人の語に人事盡處便是命といへる我佛教と至理たがいす

一富貴なれは他人も合ふ貧賤なれい親戚も離るといへる古語あり在家いさうなり僧分の身にも貧賤なれは在家是を信せて無上の佛

法の威徳をけすと龍樹大士の論にしるされたり心をもゞ慈へき地
一蓮如上人だに昔へこぶくゝあを召されし白小袖とても美濃絹のわろ
きを漸くひとつづゝめされ御心易く白小袖召されたることなく油
をめされんよも御用脚なくて燈心二筋ゐらでやきたてられすやう
〳〵京の黒木をすこしつゝとりて聖教を御覧じまたゝ月の光にて
も聖教をあらばしたるよしとるせり時世の移りかはるとかいひな
がら其流を汲もの誰かあゝに感じ奉らざらんや倹約は君子も是を
いま須倹約にして奢らざれば衣食常に足ぬべしまたなんぞ外に求
めんや奢るときゝ財産たらす足ざれゝ財産をむさぼりて奸をなす
慎むべきのいたり也
一人に財産を借るゞとなるれやむとをえざる所用ありてゐらは速

に返すべし他物をうりて返さゞるゝ廉耻を失ふ君子の行いづくに
かあるや
一吝嗇ゝ君子のせざる所也己が身にゝ衣食住所より道具調度迄お
ろそかにすとて人にまじわるに吝嗇のあざけりを得るとなかれ吝
嗇なる人ゝ是ぞ己が分際なりとおもひ定めて我に吝嗇の拙き心の
あることを知らず世上の人を見るに老にいたりてます〳〵吝嗇の
情あつくなるにころ
一いにしへの人七字口傳といふとあり身ノホドヲシレといふ七文
字なり人ごとに己が身のほどをはからず分に過て己が身よしと思
ひてあやまる事おほし是程にて己が身のほどゝおもふ所をくだり
て其一二分の所にも居たらんはまとの身の程にて安有へし

一父母に孝なるはひとたび足をあぐるにも敢て父母を忘れすゆへ
ゑ道よりしてこみちよりせす舟よりしておよがす聊にもあやうき
にゆかすひとたび言を出すにもゆへて父母を忘れすゆへに悪言口
より出さす忿言身にかへさす其身をはづかしめす其親をいつかし
めざるへし聖賢のをしへかくのごとし
一口わこれ禍の門なり多言するとなかれ多言すれハやぶれ多しと
金人の銘にしるせり言おほくして理のすくなからんよりハ言のた
らざるすまさるべき人の短をいふ事なかれ人の短を論するとを好
むものハ必己が過をしらす己が長をとくとなかれ己が長をとくも
のは必己長するものにあらすおふかた禍ハ口よりいづ行基菩薩
も口の虎身を害し舌の劍命をあつ口をして鼻のごとくならしめば

死して後もとがなしとゝろのたはひしか言行は君子の樞機ともい
へりふかく言を慎むへし
一古の人皮裏の陽秋なりし誠に世に交る護身の神符をしるへし
皮のうちに是非をわきまへ長短を知て其言に出さゝるところあらま
ほしきさまなれ人の短は耳にのみ聞て言に出さゝやむことをはす
とも十のことゝひそつばかりいハんハおぼ〆〆にて人のそし李も
なからんかう
一兄弟牆にせめけども外々のあなどりをふせぐつねに良朋あれど
も爰にたすくるとなしとは詩經の語なり兄弟ハふたゝびはかたし
不幸にして牆よせめき爭ふ中にも外よりあなどればたちまち是を
ふせぐハ兄第なりいかほどしたしきとも此ときにあたりて助るも

のなし兄弟親戚には常にむつまじあらるべし

一予がしれる人の中に八旬にあまれる老親に恨をふくみて兄と不和なれば別宅に居住して老親の安否寒温ばかりにも問はず老親をその不孝不義をあやまれみて歎かれしが老親の死後にいたれども西をむけて葬送にだにあはず次してやゝぬかゝる人よして予にしたしみちかづかんとす予じつにゆるさ須夫天地ひろく乾坤大なれども父母の恩に過るものなししかるに恨をふくみてあだとすなんぞ他人に誠あらんや予是にはぶれい不孝の同類たるべしかゝるものも天誅をうけずして富て鉅万をかさぬとも人にくからぬ目にて此人を見じとおもふことになりぬ

一小和尚一力をはげまふにもあやまれみをかくべし陶請節がそれもまた人の子なりと書て我兒のかたへ一力をつかはしけるとぞ

一人に交るには物ごとにはけて圭角なくねんどろにあしらふべしいこのほど和してうちとけ語るとも敬を主とすべし人の問來れるに久しくまたせて面會するとなかれ門に停客なしといふへ陶侃が事也

一なべて人をのしこくおそろしと常に慎みおもふへしいかに賢き人も世の人をたやすくおもはゞ禍其身に及ぶへしおもて柔和にして胸に白刃の劍あるあり又したしく莫逆の友と見るも一朝心變じてあだとなるあり益友かまれに損友かおほし慎むべき也

一人へ無智なるゝよりきと古德ものたまひしこのさかしき智慧あるかへりて人よりくまるいつはりたくみて人を惑となふもさかしき

より出きたるひとを心正直にしてすなほにいつはりのある世とだにもしらぬ人とうねがは古もあるべけれども生れにて智惠あらばその智惠あるしるしに是非を辨まふべきにあらずしていつはりたくみなどせんは是非をわきまへざる愚癡のいたり成べし

一人しきりに好む所あれば覺へずしてその情癖す財癖あるものは財貨を見て情癖すその奸におちいることをしらず名譽を愛するものの人の褒稱するにあふて情癖す他の笑をまねく事をしらず人の才貌を愛するものは才貌のすぐれたるにまどひて其情の好惡を察せずしてみなくのとし好む所あれば覺へずして情癖す一物も陶次にとゝめすたして好む所ならんにはしるべしたゞ好癖でますゝ情癖せず人にさまたげなく人のうし李をまねかざるは好て書をよむひとになるへし

一書を讀て必しも佳人ならずと古德の良談なりやゝもすれは智力あるをもていつはることを多しまた已が學識あるにほこりて人をあなどりのろしめて人に對して談笑土塊のごとくにすさながら牙あるものは出し角あるものは角をふりたつるが如しいはらん人人は良馬の嚙蹄をいひはべし一をとゞくにつけて緩急をもうがへて緩にもへきは急にすへきを思ひはかるへし水火のせまるが如きは緩にすれは命を失ふされども緩と急との中にも急にして失するは士の中に七八なり緩にして失するは才の中にもふたつみつには過須されば唐土の古人も緩の一字を書て身の慎みにはしけるとぞ

己が欲せざる所を人にほどこすなかれといふ是聖人のをしへ也夏の日にあつき冬のうらにさむき所へ人の好まざる所なり人にあしきをほどこして己が方によきをとる世人是を身がちなりといふきわめて身勝なる人我身がちなるを知ざるは實に身がちのこうじたるしるし成べし

一人をくるしめて己が樂みをきわめあるハ魚鳥のいけるを殺し調味して己が口腹を養ふを喜ぶあり人に貴賤上下の別ハあれども己が奴婢といへども皆人なり人とともに樂しむほどにそなくとも人をくるし苦て己が樂しみをきそむるは物のあはれみもなくつたなき心ざまなるべけれもろこしの古人ハ冬の日にわが家のやぶれたるを修復せんとをまうせしに家のうちなる壁にすむ虫の居所をうしなハん事をあはれみて春の日の暖かなるをまちて修補せしぞかし壁にすむ虫の寒天に居所をうしなふをだにあはれみおもふまして魚鳥の命をたちて暫時の口腹をあまなハんやされば外典にも君子は庖厨を遠ざくと見たり吾佛の教にハ物の命を殺すは身短命の現報をまねくと傳ふぞかし若其身に報ハずとも必ずれひを子孫にのこすへし

一古人の語にそのまへにほまれあらんよりハうのしりへにそしりならんにはいづれといひをきつるとそいみじけれ世人おほかた前にほまれをもとめてしりへにそしりをまねくまた身に歡樂をきそめ綺羅をまとひてその心にぬかくれひをいだくもの多し前と後と

我が一身のうへにありなんが前をしたしみ後をおろそかにせんや身と心と一己の物也なんぞ身に樂をあたへて心に深くうれひくるしむやいとおろかなる事なるへし

一寺院にても在家にても先祖より傳へて己が一代は是をたもち守りて後嗣にゆづり後代にわた須あづかりと思ふべし全く己が物と思ふゆへにほしきまゝになりては先祖の身をも心をも苦るしめし大業をむなしくす己が一代先祖よりあづかりたりとおもひさだめばもとよりよろしくわなすとも聊か損じさすへからず是ぞ先祖に對してまことをつくしまた後嗣後代へ誠をのこすなるへし

右此條數いつ孫に心にかけて愼むべし予も幼年のいにしへこゝろにつけて師父の教訓をうけぬわまよひ耳順に三四も過

れども耳の底に留めて忘れすされども師父も沒してむかしになりぬたれか師父のごとく予に一言の諫をたまへんゆへに聖賢の書を披きてはこれを吾身の諫にあてゝ戰々慄々としておそれ愼みぜめてとがすくなくて餘年を終ん事をねがふのみなり凡人の兒孫たる幼若のとき親のいさめいましむるわたへにありて聞もめなすし年漸く長じて弱冠もすぎ而立にもおよびて親なればとて心のまゝにいさめいましむれば恩情うすろぎて恨を結ぶことあり親もいつまで老ひがみて益々もとるのろしりをまねき兒孫といへども年長じても耻るゝこゝろあるべしよりて此條數を手書して是を貽す予いきて言に發せすともこれを讀て諫にあてよ死するの後ハ予が手澤とすべしたれか兒孫のためよとこゝ

我が一身のうへにありなんぞ前をしたしみ後をおろそかにせんや身と心と一己の物也なんぞ身に樂をあたへて心に深くうれひくるしむやいとおろかなる事なるへし

一寺院にても在家にても先祖より傳へて己が子代は是をたもち守りて後嗣にゆづり後代にわた須あづかりと思ふべし全く己が物と思ふゆへにほしきまゝになりては先祖の身をも心をも苦るしめし大業をむなしくす己が一代先祖よりあづかりたりをおもひさだめばもとよりよろしくわなすとも聊か損ぜさすへからす是ぞ先祖へ對してまことをつくしまた後嗣後代へ誠をかゝぬなるへし

右此條數いつ孫に心にかけて愼むべし予も幼年のいにしへわとくくにつけて師父の教訓をうけぬかまよいひ耳順に三四も過

れども耳の底に留めて忘れすされども師父も沒してむかしになりぬたれか師父のごとく予に一言の諫をたまはんゆへに聖賢の書を披きてはこれを吾身の諫にあて〻戰々慄々としておそれ愼みせめてとがすくなくて餘年を終ん事をねがふのみなり凡人の兒孫たる幼若のとき親のいさめいましむるわかたへにありて聞もめなすし年漸く長じて弱冠もすぎ而立にもおよびて親なればとて心のまゝにいさゝいましむれば恩情うすろぎて恨を結ぶことあり親もいつまで老ひがみて益々もとるのろしりをまねき兒孫といへども年長じてゑ耻るわたかるべしよりて此條數を手書して是を貽す予いきて言に發せすどもこれを讀て諫にあてよ死するの後わ予が手澤とすべしたれか兒孫のためよとこしま

を示さんや予が心にだにはぢらんと思はゞ月ごとの朔と望とこれを讀てこゝろに銘じて慎むまるべし

右二十五條者蓋理綱院講主之遺訓也頃日得諸壁間可謂遺兒孫之至寶矣今茲天保壬寅佛滅日遺弟成寫以壽梓傳諸千載之後若同志之人庶幾有補於風化之萬一云爾

僧俗教誡終

明治廿七年八月廿三日印刷
同　年同月廿七日發行

校訂者　京都市下京區中珠數屋町烏丸東入廿人講町廿二番戸　西村七平

發行兼印刷者　京都市下京區中珠數屋町烏丸東入廿人講町廿二番戸　西村七兵衛

發行所　京都市東六條　法藏館

●法味愛樂新刊書廣告●

●譬喩因緣 法味愛樂談

全一冊　正價金廿五錢　郵稅金四錢

本書は一部六十章より成立ち毎章巧に精選金玉の譬喩因緣を擧げて法義と合せ學敎の御文を引て之を証し尚又古德の詠歌を以て其義を助顯し且つ誰にても讀み易き樣總て傍假名を附け親切叮嚀に誘導したる完全無缺の良書あれば僧家は之を以て唱導の材料指針となすを得べく又一般の同行は之に依て大家の法話說敎を聽聞すると同く我屋に居乍ら何時でも御緣に逢ふて法味を喜ぶことを得べし苟くも眞宗有緣の人々は乞ふ速に購求せられよ

●法味因緣 葛原道心

全一冊　正價金六錢　郵稅金二錢

本書は道心の一代記にして法味をまぜ一讀或は喜はしめ或は泣かしめ一種の香薫妙味の充足するあり今目次の二三を揭げば●第一　葛原道心出家の事　●第二　妻子眷族感嘆の事　●第三　落葉の前死去の事其他……

●中將姫之傳

全一冊　正價金拾錢　郵稅金二錢

本書ハ近來滑稽家トノ其名ヲ知ラレタル木村半休居士ノ著ニシテ世々該傳記ハ數多アレドモ本書ノ如キハ居士ガ興正派本山在職中同本山秘藏ニ備置セル書又ハ他ノ傳記等ヨリ拔萃シ之ヲ橘香洲散人ガ校閲シテ京都開明新報上ニ連載セシ者ナレバ其著ノ流暢ナル其事實ノ簡明ナル觀ル者嘆賞シテ措カス故ニ居士ニ乞ヒ更ニ一小冊子ニ編輯セシモノナリ

發行所　京都市東六條　法藏館